

■濱田滋郎 (音楽評論)

以前に当欄で紹介したルイス・フレイトス・ブランコ(1890—1955)による管弦楽曲集の続篇。《交響曲第2番》は《第1番》と同様、十分にすぐれた筆致で書かれた、伝統的4楽章の作品である。第1楽章序奏部のアンダンテにグレゴリオ聖歌が使われているのは、作曲家の実姉が修道院に入ったことに因むとか。全体に後期ロマン派の気配が濃いのは1926—27年の作としては後ろ向きかもしれないが、却ってそれ故の良さもある。とりわけ第2楽章アンダンテ・コン・モートにこもる、皮相的でなく「ファド的」と言ってもいい抒情味は出色で、ここを聴くためにこの1枚を手に入れて損はないほど。19世紀ポルトガルの文人G・ジュンケイロの詩「ドン・ファン」の死」にもとづく幻想曲は19歳の作(それにしても大した才能)だけに、傾倒したR・シュトラウスの影響大。3曲目も幻想曲風、これは英国作家クインシーの『ある阿片常用者の告白』によるほの暗い音楽。全盤、好演だ。

Freitas Branco, Luís de



フレイトス・ブランコ／管弦楽作品集-2
(交響曲第2番, ゲーラ・ジュンケイロを読んで(幻想曲), 人工楽園)

アルヴァロ・カースト指揮RTÉ国立so(ポルトガル)
〈録音:2008年4,6月〉
[Naxos©8.572059]